

評論

4. 体育系大学における学内競技力サポート体制のあり方

勝 田 隆

The Athlete Support System in a Sports Science University

KATSUTA Takashi

1. 競技力向上サポートとは

37個のメダルを獲得したアテネオリンピック（2004年）での日本選手団の成果について、総監督を務めた福田¹⁾は、「情報・医・科学サポートの充実と組織化」をその要因のひとつとしてあげている。

競技力向上を図っていくために、「スポーツ医・科学研究の充実や資金面をはじめとする各種の支援体制の確立など、側面的な条件整備を図ること」²⁾が必要であることは言うまでもないことであろう。

勝田³⁾は、競技力向上の資源として、「ヒト、モノ、カネ、情報、時間などが考えられる」としているが、競技力向上のための支援とは、これらの資源を効果的に活用し、システムやプログラムとしてコーチングやトレーニング現場に、適切かつ組織的に反映させていく活動と捉えることができるだろう。

2. 「スタッフによるサポート」と「プログラムによるサポート」

黒田⁶⁾は、競技者のコンディショニングに関わるサポートを行うスタッフとしてコーチ、マネージャー、スポーツドクター、アスレチックトレーナー、ストレングス&コンディショニングコーチ、スポーツ栄養士、エクイップメント・マネージャー（用具・衣服管理）、カウンセラーなどをあげている。勝田は、これらのスタッフに加えて、競技力向上のために必要なスタッフとして、アナリストも含めた情報戦略スタッフやサイクロジスト（心理サポート）なども加え表1に示すようなモデルを紹介している。

また、勝田は、競技力向上支援の組織的体制には、「競技者のパフォーマンス向上の基礎となる能力や専門能力を開発・育成することを目的としたものや、あるいは、優秀なアスリートが競技に専念できるように社会的・経済的側面からの支援を目的としたものなどがある」とも述べている。そして、このような目的を達成するためのプログラムには、「①体格や体力の向上を目的としたプログラム、②ゲームや運動の構造、ルールなどの理解向上のためのプログラム、③技術や戦術に関するプログラム、④栄養学・心理学・生理学といったスポーツ医・科学に関するプログラム、⑤社会性

や国際性を向上させることをねらいとしたパーソナルスキルに関するプログラム、⑥情報機器操作を含めた情報活用能力を向上させようとする情報リテラシーに関するプログラム、⑦進学や就職といった引退後について考え、そのための準備を支援するプログラムといったものがある」とも紹介している。⁴⁾

以上のように、競技力向上のためのサポートは、コーチングスタッフやメディカルスタッフといった「ヒト（スタッフ）」によるものと、競技者の社会性や競技意欲を啓発し、高めようとする「プログラム」展開によるものとに大別できる。

前者の「スタッフによるサポート（スタッフサポート）」の体制づくりにおいては、スタッフ個々の役割や責任を明確にしたうえで、スタッフ間のコミュニケーションを重視した組織化が求められ、後者の「プログラムによるサポート（プログラムサポート）」においては、プログラム内容の充実や展開にあたってのカリキュラム構成、あるいは講師の質の保証などの体制が重要となる。

表1：競技スポーツ現場で見られる主なサポートスタッフ

領域	スタッフ	解説
指導	監督、コーチ	技術・戦術等の指導。競技者、チームに対して直接的な役割を有する
	ストレングスコーチ	運動生理学の知見を中心に、運動能力を最大限に高める支援者
	フィットネスコーチ	競技に適した体力も含めた身体機能をも高める支援者
	コンディショニング	競技をする上で心も体も一番よい状態に整えるための支援者
医・科学	ドクター	医師
	アスレティックトレーナー	健康管理、障害予防、コンディショニングなどを行う
	マッサージ	マッサージ師
	理学療法士	リハビリテーションなどを行う
	栄養士	栄養・食事面でのサポートスタッフ
	サイコロジスト	メンタル面でのサポートスタッフ
情報・分析	テクニカル	情報を専門的かつ戦略的に扱うスタッフの総称
	アナリスト	情報の分析者
	スコアラー	記録者
経営・管理	マネジャー	チームや組織の運営等の管理者、責任者。「監督」を指すこともある
	メディア	広報担当
	トレジャー	財務、経理担当
	セクレタリー	総務
	キットマスター	衣服用具管理者。バゲッジマスターとも呼ばれる

3. 体育系大学への要望

体育系大学が有するスポーツ医・科学面を中心とした機能を、大学内外のスポーツ活動に反映すべきであるとする社会的要請は強い²⁾。

特に学内に反映する際には、そのひとつの方策として、「(学内に) 競技横断的なスポーツ支援組

織を設けるなど」の取り組みを積極的に行うことが求められている²⁾。

この点については、仙台大学でも競技力向上のための「競技横断的なスポーツ支援組織」の必要性を認識し、「スポーツ医・科学の成果を大学スポーツ現場に反映させる」ことを緊急の課題としている⁷⁾。

そして、仙台大学では、このような課題に応えられるような取り組み、すなわち競技力向上を目的としたスタッフサポートやプログラムサポートにあたる活動をすでに展開し始めている⁵⁾。

特に、運動系サークルを常時サポートするトレーナーサークルや分析サークルといった学内サークルの誕生や、また、高度な競技力向上を目指すいくつかのサークルの求めに応じて、コーチングや健康、あるいは心理、栄養、生理といった分野の研究室が、独自の支援プログラムを創り提供していることは、本項の冒頭で述べた「(学内の) 競技横断的なスポーツ支援組織」に該当もしくは繋がるものであると考えられる。

4. 学内競技力向上サポートモデルの提示

図1、表2に示す組織と、表3に示すプログラムモデルは、前項で述べた仙台大学で見られる「競技横断的なスポーツ支援組織」に繋がると思われる活動を機能的に組織化し、競技力向上のための学内支援体制として明確に位置づけ、発展させようと意図したものである。

この体制の特徴は、教育課程や研究室を中心とした研究活動が、高い競技力向上を目指すサポート部のようなサークルをダイナミックに支援する学内サポート組織「スポーツ・サポート・センター(仮称)」と繋がる点にある。このことは、サポート受ける側からすれば、言うまでもなく競技力向上のために必要なさまざまな支援を継続的かつ計画的に受けることとなる。さらにこれらの支援は、

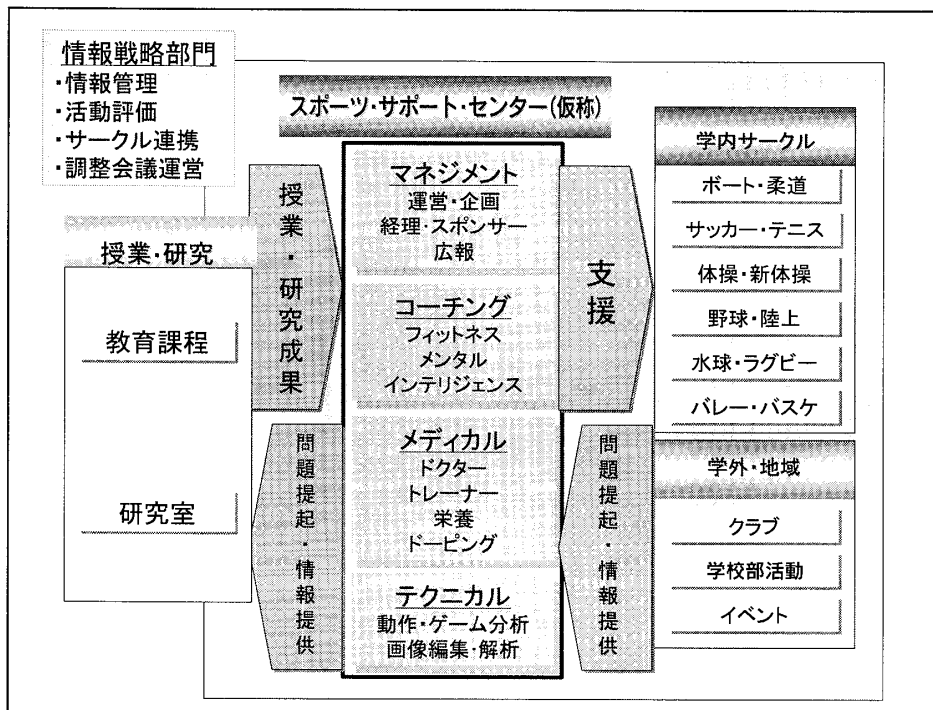


図1 学内競技力向上サポート体制モデル

これまでの体育系運動部に見られたような閉鎖性を解消する機能を有することも同時に期待できる。

一方、競技力向上のためのさまざまなサポートを、適切に提供することを目的とする「スポーツ・サポート・センター（仮称）」と繋がる「授業」や「研究」の側からすれば、授業に関しては演習や実習の「場」として、研究活動に関しては、研究の知見を反映させる「場」あるいは実験や研究データを得る「場」となるメリットも考えられる。

なお、「スポーツ・サポート・センター（仮称）」と学内サークルおよび学外組織との連携調整を行う機能として「情報戦略部門」を設ける。この部門は、以下のような役割を担う。

①情報を集中管理、②情報の戦略的活用と運営、③各部門の活動の客観的評価、④包括的（全学的）問題定期（解決策の模索を含む）、⑤学内サークルおよび学外組織との連携調整および会議等の運営

いずれにしても、図1に示すような組織モデルが構築され、「スポーツ・サポート・センター（仮称）」の存在（機能）が、高度な競技力向上を目指す学内運動系サークルの活動に不可欠なものとなり、競技現場において現実的な成果をあげることができれば、このモデルは、体育系大学の新しいあり方を提示するものともなると確信する。

表2 「スポーツ・サポート・センター（仮称）」の機能

●マネジメント部門	運営・企画、マーケティング、経理、広報（メディア対応）などのサポート
●コーチング部門	ストレングス、フィットネス、コンディショニング等に関わる指導サポート 走動作、アジリティー、コーディネーション、リズム感などといった基礎的運動能力向上サポート コミュニケーションスキルやストレスマネジメントといった教育プログラム指導
●メディカル部門	医務、安全、栄養、アンチドーピングに関するサポート（指導も含む）
●テクニカル部門	ゲームやパフォーマンス分析。情報提供などのサポート

表3 競技力向上支援のためのプログラムモデル

主なプログラムとその目的
1. コミュニケーションスキルの向上
2. プレゼンテーションスキル向上
3. 現状把握、課題発見、問題設定・解決能力向上
4. チャンス発見・目標達成計画
5. 論理的思考能力向上
6. メンタルタフネス、ポジティブシンキング能力向上
7. ストレスマネジメント
8. IT活用能力向上
9. スポーツ医・科学活用能力向上
10. ソーシャルスキル
11. 英会話
12. セカンドキャリアサポート
13. 就学、進路サポート

参考文献

- 1) 福田富昭.「競技総括」.第28回オリンピック競技大会日本選手団報告書.日本オリンピック委員会.2004
- 2) 「生涯にわたる心身の健康の保持増進のために今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」.保健体育審議会.文部科学省.1997
- 3) 勝田隆.「現場指導者のためのチームマネジメント」.日本体育協会.2005
- 4) 黒田善雄編集.「スポーツのためのセルフケア」.文光堂
- 5) 勝田隆.「知的コーチングのすすめ」.大修館書店.2002
- 6) 関岡康雄.川口鉄二他.「体育系大学における新しい運動部の在り方についての実践的研究」.仙台大学.7)2002
- 勝田隆.「新しい総合型スポーツネットワークの創造～スポーツネットアカデミーの試み～」.仙台大学紀要.第32巻.第1号.2000.

(平成17年1月20日受付,平成17年2月1日受理)